嵯峨本『伊勢物語』(慶長十三年版初刊　館蔵)の漢字形活字について

元中央図書館参事　森　上　　修

本学中央図書館に嵯峨本『伊勢物語』（二冊、九行十八字詰め）の慶長十三年(1608年)初刊本が所蔵されている。該書は行草体平仮名交りの美麗な色替り本である。嵯峨本のうち印行年の確かな古活字版として特に注目され、また洛西・嵯峨の角倉素庵と親交のあった古典学者である中院通勝の由緒ある校定本として広くしられており、すでに昭和56年９月に国立公文書館内閣文庫本の影印複製版が刊行されていて、印字面の概要をうかがうことができる。

ところで、一昨年の秋、奈良市の大和文華館において「没後370年記念角倉素庵　特別展」が開催されたが、その際に嵯峨本『伊勢物語』（初刊本）などの版下字体に関して書学関係からの新見解が提出されたこともあってか、そのころから関西方面を中心として嵯峨本に対する関心がにわかに高まってきている。例えば、昨年あたりからは、その嵯峨本の『伊勢物語』に関して伝存諸本の所在調べや版種別の調査・研究などが相次いで始まっている。実のところ筆者もまた、至らぬながら、この数年来、館蔵本について全丁にわたる印出字の実態調査を進めているのであるが、このほど漢字形活字のうち二字連彫と漢数字の活字駒に関してその異同調査を完了した。

これらの漢字形活字は、その印字長から全格駒と二倍格駒に類別できるが各字種の印字様をそれぞれ詳しく比検すると同一活字による繰り返しの使用例は頗る稀であり、その殆どは互いに字形の似通った別活字を用いて印出されているという何とも意外な事実が明らかになった。

本稿では、とりあえず、それら酷似形の字様を呈する印出字をいくつかとりあげ、その特異な活字駒の使用実態について概略的な報告をさせていただくことにしたい。

宝永七年(1710年)の刊行になる中村富平撰の『辨疑書目録』によると、角倉本つまり嵯峨本のこうした『伊勢物語』や『方丈記』、『徒然草』あるいは「観世流謡本」などはいずれも植字本（活字本）ではなくて木版本として扱われていたようである。しかしながら、『伊勢物語』をはじめとするこれらの諸本はすべて活字版とするのが正しいであろう。

館蔵本の『伊勢物語』（慶長十三年初刊）には上冊の第30丁（表１・２行間の上）に行間用込め物（インテル）の墨痕が認めれ、またこれと同版の天理大学附属天理図書館本などにおいても、他丁にこのような込め物の痕跡が見受けられる。従ってこれが活字版であることは確かである。それでは漢字形の二字連彫活字から観察することにしよう。

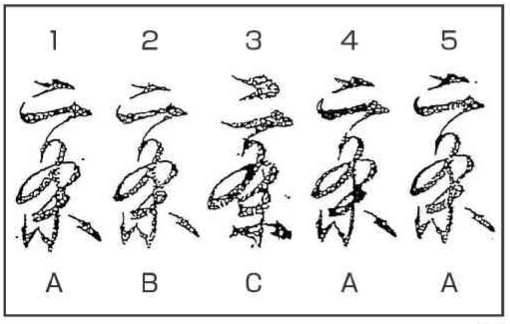

図1

まず、はじめに「二条」の印出字（図１）を出現順に掲出する。これらの五例の印出字（１［４ウ５上］２［７ウ３下］３［９ウ２上］４［下２５オ９上］５［下４６ウ９上］）を

比較すると、上冊の三例はいずれも印字様が異なっており、そして下冊の二例は上冊の印字様Aと全く同じであることがわかる。このように、この印字様Aについては合わせて三度の出現が認められるのである。こうした印字様Aのごとき完全同一の字形を呈する印出字の重出現象こそは、まさに同字形を幾度も印出しうる活字駒の使用により、植字、摺刷の印刷工程が繰り返し行われたことを如実に示すものと解されるのである。

このことから、該書が木版の彫板技法に基づく印本でないことは確かである。

次に、「心地」の印出字（１［１ウ６中］２［２０ウ８下］３［下６３ウ４下］を示す。

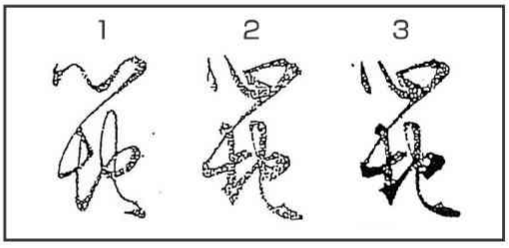

図２

（図２）この三例においては、それぞれの印字様が相違しており、三種類の別駒活字を用いて印出されていて同一の活字駒が重用されていないことがわかる。

続いて、「納言」（１［９ウ７上］２［下２９ウ７下］）および「宮古」（１［１７オ５下］

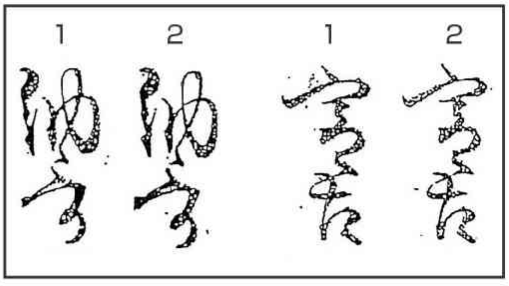

図３

２［２１ウ６上］）の印出字（図３）を眺めてみよう。この「納言」と「宮古」についてはともにそれぞれの印字様は殆ど同じように見える。しかし、詳しく双方を比検すると、実は別駒による二種類の活字で印出されていて、同一駒が使用されていないことが判明するのである。

それでは、次に漢数字の全格活字にあってはどうなのかという点をみることにしよう。

まず、「十」字に関しては五度（１［５ウ４下］２［下３１ウ６下］３［下３５オ３下］４［下４０オ８上］５［下４９オ９上］）にわたって出現するが、同一駒の重用は見られずこれらはいずれも字形の異なる五種類の別駒活字（図４）で印出されている。「三」字

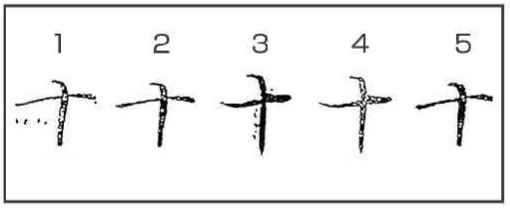

図４

については五例（１［４７オ６上］２［下１０オ２上］３［下２７ウ７上］４［下４４オ９下］５［下５２オ６下］）の印出字が認められ、これらのうちはじめの四例はいずれも相似の印字様（図５）を呈するもののやはりそれぞ

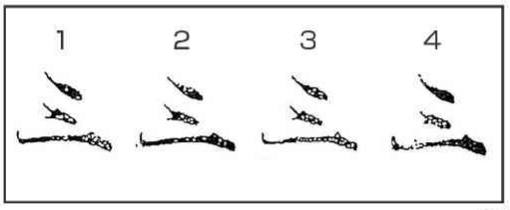

図５

れは別駒活字によっており、同一活字の印出字は見られない。

さらには、「一」字の四例（１［３０ウ２下］２［下１０ウ５上］３［下３４オ８上］４［下３５オ３下］の印出字（図６）をはじめ「六」

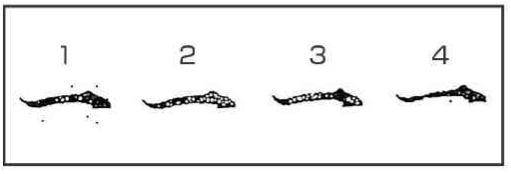

図６

字の三例（1［下３１オ２下］2［下３１ウ６下］3［下５２オ６下］）もやはり似通った字形（図７）の別駒活字を使用したものであり、同一駒を重用していないことがわかる。

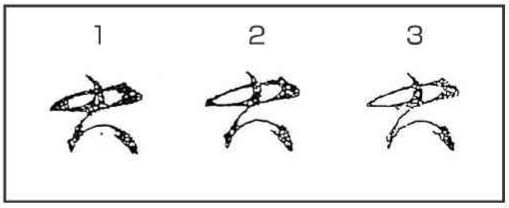

図7

なお、このほかに「二」字の二例や「五」字（三種）の六例などもすべて別駒活字によっていることが認められる。

このほか、三字連彫活字や四字連彫活字についても、すでに全数の下調べが完了しているので順次、報告する予定であるがこうした多字連彫の活字駒においても事情はやはり同じであり、特定の同一駒を繰り返して重用するような事例は至って少ないのである。

このように、該書においては活字版技法の基本原則をまるで無視するかのごとき異様な組版の実態が看取されるのである。

組版に際して、同一の活字駒を殆ど反復利用することもなく明らかに無駄ともおもえる異別の活字駒を数多く彫造して混用するようなことが一体どうして行われたのであろうか、はなはだ意外をいうべきであろう。

印出字の精査によって判明したこの事実こそ活版技法上においてきわめて特異な排字事象としてとらえねばならないであろう。

やはり、該書は同一活字の重用を基本とする一般的な古活字版の類とは相違する趣きの異なる活字印本ではないかと考えられるのである。

同版本である他館所蔵の諸本をも含めて比検したところでは、各本ともそれぞれに別活字の差し替えが、かなり頻繁に行われており、摺刷面が両冊の全丁にわたって一致するような印本は見出せないのが実情である。

そうしたことから、この嵯峨本『伊勢物語』（慶長十三年版初刊）の諸本に関してはそれぞれ印字面の画一的な仕上りを意図的にさけているように見受けられるのである。

つまり、これは筆写本のごとき書相の〈手作り本〉を印刷方式によって多量に生産しようと試みた特異な平仮名交り活字版ではなかったろうか。

版木上に彫字を施こす整版技法の刷版では文字面が全く固定化してしまうのに対して、この活字版方式では多数の別彫活字を任意に差し替える作業なども簡単にできて版面の部分的な変更はいたって容易に行えるであろう。

活版の一般的原則に違背し、また厖大な量にのぼる利用頻度の低い連彫活字を多用するこの奇妙な組版印刷本を筆者は特異な写本的木版活字本と呼ぶことにしている。

館蔵本の印出字から各活字駒の縦寸法を割り出すと、およそ全格駒（T）は12.5粍強、二倍格駒（2T）は25粍強、三倍格（3T）が約38粍、四倍格駒（4T）が50.5粍強となる。

なお、ほかにこれらに対応するやゝ短い四種類の活字駒（〔1～4〕T—α）も存在する。

活字駒の横幅寸法は約14粍である。

両冊のうちで一行の印字寸法がもっとも長い個所は下冊第12丁ウの第1行（18倍格）であり、約228.5粍を計る。

因に、館蔵本は小汀文庫旧蔵本で、従来の川瀬一馬氏による分類では第一種本に属するが、これと同版とみられるものに、天理図書館本、内閣文庫本、秋田県立図書館本、東北大学附属図書館本、大東急記念文庫本、国立国会図書館本などがある。

そのうち、内閣文庫本だけはいささか様相が異なり、下冊部分に別版の補配がみられる。

また、この慶長十三年版にはほかに第二種本と呼ばれる京都大学附属図書館本や早稲田大学図書館本などが知られている。

嵯峨本『伊勢物語』には挿絵49図（上25図、下24図）が収載されているが、この第一種本と第二種本の全図を相互に詳しく調べてみると、双方は同一の版木を用いて摺刷されているこ

とがわかる。そして、第二種本では第一種本に存在しない版木の損傷が新たに二個所（上27ウ、下17ウ）において発生（表1）しているのが確かめられる。

版木の損傷（×）

	損傷個所	第一種本	第二種本
上冊	5オ	×	×
	27ウ	―	×
	34オ	×	×
下冊	4オ	×	×
	17ウ	―	×
	18ウ	×	×
	29オ	×	×
	34ウ	×	×
	41ウ	×	×
	64オ	×	×

（表1）

従って、このことから第一種本が先出の初刊本であり第二種本はその後の再刊本と認められるであろう。

なお、再刊本には初刊本の摺刷紙を補配した一本が伝存するので、この両刊本は同じ造本工房内で装訂されたものと考えられる。

これまで、筆者は慶長十三年版初刊本に主力を置いて調べを進めてきたわけであるが、今後は同再刊本の印出字との比較精査にも着手したいとおもっている。

最後になったが、今年度よりこの館蔵本を用いたデジタル・データに基づく嵯峨本『伊勢物語』の印出字の悉皆調査が鈴木広光氏（奈良女子大学）を中心に実施されており、その調査報告が俟たれるところである。

本稿を成すにあたり、長澤孝三氏（帝京大学）、牛見正和氏（天理図書館）、小秋元段氏（法政大学）、岡本聰氏（芦屋女子短期大学）、高木浩明氏（代々木ゼミ）、松田博氏（京都大学大学院文学研究科図書館）、岡友美子さん（本学中央図書館）、川崎安子さん（武庫川女子大学附属図書館）などの方々にご示教ご助力をいただきました。ここに深謝申し上げます。　（平成16年8月16日記）